

市民公開シンポジウム

「歴史から学ぶ感染症への視点」-3

流行病と養生に役立つ漢方

星野 卓之

北里大学東洋医学総合研究所

パンデミックの数年間を経て、ウイルスなどによる流行病に対する養生法への考え方が科学的にアップデートされ続けている。新型コロナウイルスに限らず、ウイルスの変異は速く、ワクチンの開発は新しい株に対処できないことがわかってきた。流行病を予防・治療し、さらに後遺症から回復させる方法として、日本の伝統医療である漢方は、今回のコロナ禍でどのように活用されただろうか？

当初、肺の深い部位まで感染し傷害を来していた新型コロナウイルスは、デルタ株・オミクロン株となって、より浅い咽頭・気管を炎症の主座とするようになった。感染力は増したが軽症化したため、集団免疫が獲得されてからは、海外では感染対策を行わなくなってきている。

中国ではアルファ株までの新型コロナ肺炎に対し『傷寒論』という漢方古典から処方創成された。日本でも日本東洋医学会主導で急性期治療の臨床研究が行われ、葛根湯などの『傷寒論』処方を兼用する治療で効果がみられている。

そもそも『傷寒論』の「傷寒」が、新型コロナのような呼吸器感染症か、腸チフスのような消化管感染症だったかはわかっていない。今回のパンデミックで、流行しているうちに株が変化し、病原性も大きく変化していくことからすると、歴史上の流行病についていくら病原体を追及しても、現在とは全く違う病気であった可能性が高いことがわかる。『傷寒論』が漢方の古典として重要と考えられているのは、そのような変化していく病気に対して、ヒト側がどう反応したかに注目して薬を選択するという治療論を確立したからである。

『傷寒論』は江戸中期以降、日本の漢方界で重要視され研究されてきた。一方、新しい処方を使う後世方派では、流行病の予防や慢性期に頻用される補中益気湯などを活用してきた。現在問題となっている新型コロナウイルス後遺症に対しては『傷寒論』の処方だけでなく、後世方も駆使して対応する必要が生じている。

北里大学東洋医学総合研究所の漢方鍼灸治療センターでは新型コロナ後遺症外来を立ち上げ、来院困難な場合は遠隔診療も活用して治療を行い、2021年から2年間で300例以上の受診があった。症状としては全身倦怠感や咳嗽、嗅覚・味覚障害、微熱・頭痛などが多く、重症例では生活に支障を来すほどであった。漢方的な視点からは冷え症が特に女性に多い傾向があり、体を温められる漢方治療は良い適応と考えられた。

漢方薬は保険収載されエキス剤として簡単に処方されるようになり、昨今では供給に困難が生じているほどである。しかし、新型コロナ後遺症の様々な愁訴には、エキス剤にない煎じ薬も活用する必要がある。今後も流行病の予防・治療・後遺症に対してどの漢方が効果的かは、患者と医師が協力しあって明らかにしていくことになる。歴史的な伝統医療は、これからも患者自身が主役となって、後世に引き継がれていくのである。